

夕方の軒先とホテルの夜 切り取った感覚で手に取ったスマホ

その切り取った感覚の欠片で景色を見ているだけ。

・ ・ 女子は駅を出た。

通りがかりに店でアクセサリーなどを立ち見して、途中でバス停を通りすぎて美容院へ立ち寄る。

・ ・ 歩きながら ・ ・ ・ 感覚は空を流れる
星のように移り変わっていき形を変える。
る。

その後ベンチに座り女子リリナはW i
ー F i を持っていた。手に取れるサイズ。

日中の空はいつも通り。感覚値とリュック・・・片手で直すように照らし合わせる。

ズボンとリュックが交差。ベンチの上、太もも・・・日中の空太陽が照り付けている。

薄暗い小さな部屋の中。カーテンを開けた窓のその先に星空がありそこで没頭、

目がいかずに夕方から朝にかけて断片はリュックの中で延々と続き震わせるベッドシートの上と隔離していく。

朝もまた・・・。

夕方と始まり、溶解する時間。

過去もまた小部屋の時間とは別に・・・。

感覚断片のテーブルは、

• • • ◦

ホテル丘の上に残っていた。

そのひとときを過ごした女子は成長し
新しい世界へ進んでいくが、

感覚断片はまだしばらく丘の上で続き、

ビルの上の空は季節に関係なく曇り、どんよりと西の向こうまで・・・。

女子は引っ越し、以来たくさん夜の越えて多くの経験を積み、

別の分野トンネルノートを広げた。

そしてまたビル屋上の空を見上げる。

途方に暮れるような気持ちと忙しさ、

丘の上のホテルの坂道は、浴室の片隅にあったアクセサリーの記憶とともに薄れている。

切り取ったその時の断片はまだそこに残っているが、

休憩時、街の景色を見ながらそんな気も
なんとなくする。

(体験版は以上になります。ご読了あり
がとうございました)